OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	探求のある風景 ―Philosophy for Childrenについて考えたこと―
Author(s)	中川, 雅道
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69678
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　中川雅道　）	
論文題名	探求のある風景　―Philosophy for Childrenについて考えたこと―

論文内容の要旨

以下、論文全体の構成を、各章の内容を要約することで提示する。

第二章「不和と平等」は私がp4cを始めた初めの頃のうまくいかなかった経験をもとにして書かれた章である。なぜうまくいかなかったのかを考えている時に、フランスの政治哲学者ジャック・ランシエールのテキストに出会った。アリストテレスに準拠しながら、ランシエールは不和という問題の本質を「言葉が通じないこと」と考えた。相手の言葉を言葉として認めず、話す主体を同じ人間だと認めないことが不和を生み出す。その状態をランシエールは、感性的なもののパルタージュと呼んだ。その不和に、共通の土台をつくる試みとして、ランシエールはジャコトという「無知な教師」が行った実践に注目する。不和の解消が、教育のうちに描かれていることは示唆深い。しかし、私の実践の変化は、ジャコトの実践を徹底することとは異なった方向から訪れた。

第三章「困難の解消 ケアへの転向」は、p4cハワイを牽引してきたDr.トーマス・ジャクソンという師を得た経験がその内容の中心となる。ハワイのワイキキ小学校を実際に訪れたときに、p4cがどのようにして学校の中に受け入れられているのかを見ることになった。その風景を見たことによって、自分の実践を変化させる大きなことに気づいた。子どもたちが何に興味を持ち、何に関心があるのかということを、教室にいながらケアすることが最も大切で、その場にいる先生ができる最大限のことではないのかということだ。子どもたちの興味へのケアによって、それまで萎縮していた「探求のコミュニティ」が自らの関心によって立ち上がっていく様子が目の前で展開することになった。

第四章「P4Cの再構築」は、マシュー・リップマンが作ったオリジナルのP4Cがいかにしてハワイで再構築されたのかということを論じている。p4cハワイは、コミュニティボールやインテレクチュアル・セーフティといった独自のツールやコンセプトを生み出した。そこには、教員を含む学校全体へのケアが含まれているとともに、アカデミックな大文字の哲学とは区別される、小文字のテツガクを大切にするという姿勢があることを論じている。また、その小文字のテツガクを重視する姿勢が、個別の生をケアする教育の可能性を開いていると言えるだろう。この章の目的は、P4Cのあり方を再構築したハワイ独自のあり方を説明することで、私自身が、あるいはすべての読者がP4Cを教育の中に、あるいは自分自身の中に再構築することにある。

第五章「実践としてのセーフティ」では、さらにインテレクチュアル・セーフティについての考えを進めた。この章では、Dr. トーマス・ジャクソンのインタビューと、そのインタビューを生徒と鑑賞し、議論した授業が中心になる。セーフティの内実は各人の内面にまで至ること。そして、人格の輝きを美しいと捉える視点がp4cにはあることをDr. トーマス・ジャクソンは語っている。生徒たちは、インタビューの内容を受け入れたり、疑問を素直に表現したりしながら、それぞれの形で問いを引き受け、考えを語った。様々な語りの中から、私自身はインテレクチュアル・セーフティが、永続的に成立する状態ではなく、常にケアの対象となるような理念であることを論じた。インタビューの内容と、対話の様子については、資料5と資料6として本論文の末尾にまとめている。

第六章「教育とは何か」では、これまで個別的に論じてきたことを、そもそも教育とは何なのかというところまで遡って論じた。考察のヒントにしたのはジョン・デューイの教育に対する考えである。リップマン自身が明言しているように、p4cはデューイを始めとするプラグマティストたちの影響を色濃く受けており、この章の「教育とは何か」という問いはその意味でも始原にまで遡った問いだと言える。デューイは環境へ適応する必要に迫られたときに生物は成長すると考え、その成長のプロセスを組織的に行うことこそが教育だと考えた。その成長のプロセスは生きることそのものであり、教育は教育以外には目的を持たないことになる。その教育の理念を、平成27年度に神戸大学附属中等教育学校の公開授業研究会で行った森鴎外『高瀬舟』の授業から窺うことができる。『高瀬舟』を読み、問いを立てるという授業の中で、生徒たちが自分自身の経験とつなげながら読み、問いを立てる様子が見られた。その後の対話では、問いに対して自分の経験やテキストの解釈によって応答がなされた。そのプロセスは、自らの経験のうちに問いを見いだし、その問題に対して他の参加者たちがそれぞれの経験をもとにして答えるという意味で、生きるプ

ロセスそのものであることを論じた。公開授業研究会の指導案と対話の様子については資料3と資料4として本論文の末尾にまとめている。

第七章「連続性と相互作用」は評価についての論考である。デューイは成長を促す経験が確かに存在すると論じ、成長を促す経験を説明を、経験の二つの原理として構想した。経験の連続性と相互作用である。ある経験が後の経験に連続し、相互作用を起こしていることが成長の要件となる。「p4cを紹介するポスターを作成し、ポスターの内容を説明する文をつける」という課題を毎年、年度の終わりに実施しているが、そのポスターの評価を、経験の原理をもとにして、作成者の説明文や、その内容を複数年にわたって参照することで考察を加えた。その中で、p4cに対する実践者の評価が変化することを論じた。

第八章「探求のコミュニティ」は、プラグマティズムの創始者チャールズ・サンダース・パースの探求のコミュニティと呼ばれる概念が、p4cの中核的な考え方になっていることを論じている。パースは、探求を信念を変化させるプロセスとして考え、実践的なレベルで理解していた。また、そのような変化を引き起こす思考のプロセスは行為そのものであり、探求のコミュニティを教室の中につくることは、単なるおしゃべりの場をつくることではなく、信念を共同で改訂する場をつくることになることを論じた。

第九章「率直に語ること」は、生徒に対して行ったインタビューが中心になる。p4cを継続的に経験してきた生徒たちがp4cの授業をどのように振り返るのかを明らかにするために、いくつかの質問を生徒たちに行った様子を撮影し、その内容について考察を行った。ミシェル・フーコーのパレーシアという概念をヒントにして、勇気をもって自然に語られるような語りが周りを触発し、さらなる勇気ある語りを促す。そのような言葉が言葉を自然に生み出すプロセスこそがp4cの神髄であり、率直な語りは学校を閉鎖的にする様々な要素に対する有効な手立てになるという確信について論じた。

また、間奏という形で「タゴールと鳥」と「強いとか、弱いとか、いうこと」という二つの章を挿入している。これは、なぜ私がp4cに取り組んでいるのかを説明するために自分自身のことを語った章である。ベンガルの詩人タゴールのことを、現代の哲学者ヌスバウムは人文学／人間性 Humanities を育む教育の源流として論じている 。「タゴールと鳥」では、タゴールの作品『鳥の物語』に込められた想い、学校という場が人間性を殺す場になりうるということを、私自身の経験を織り込むことで描き出した。「強いとか、弱いとか、いうこと」は「いじめ」の経験についての物語である。中島敦は『虎刈』という作品の中で趙大換という人物を創造した。ある日、日本人の上級生集団に暴行を受けた趙は繰り返す。「強いとか、弱いとかって、どういうことなんだろうなあ……なあ。全く」 。この問いを受け止める作業を、私自身の経験を語りながら書きだした。いずれの経験も、学校という組織を担う教員になることを躊躇させるに十分な経験で、ある種の屈折を私自身の中に生み出した。学校が人間性を破壊する組織であったり、複数人で生きることが苦痛を生むことがあったりする。そのことが確かにあることを認めつつ、しかし、そのような経験に逆行し、対抗するようにp4cの経験は人間性を育む経験となりうることが、この博士論文全体の主題になるということを表現した。

成果と課題について。本論文は、まだ全国的には実践例の少ないp4cの実践を記述した、実践報告としては価値がある。しかし、課題のほうは数々挙げることができる。教育研究の倫理的配慮が十分になされているという客観的な指標を、研究の前に定めていなかったため、今後は対話録を公表することに関わるガイドラインの作成が必要になるだろう。また、研究の手法として、対話録の作成方法や分析の方法についても、妥当性のある結論を導く方法になっているのか、甘さが残る。文献から引用した箇所を実践についての分析に移行させる瞬間に、私自身の主観的な判断がかなり入っているところも今後検討せねばならない。今後、p4cが様々な地域、状況で実施されていくことを目指すならば、実践者が反省する方法としての研究についての知を集積していく必要があるだろう。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　中川　雅道　）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	大阪大学　教授	浜渦　辰二
	副 査	大阪大学　教授	堀江　剛
	副 査	大阪大学　准教授	本間　直樹
		大阪大学　元教授	中岡　成文

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　探求のある風景
―Philosophy for Children について考えたこと―

学位申請者　中川　雅道

論文審査担当者
主査　大阪大学教授　浜渦　辰二
副査　大阪大学教授　堀江　剛
副査　大阪大学准教授　本間　直樹
副査　大阪大学元教授　中岡　成文

【論文内容の要旨】

本論文は、1970 年代にアメリカの哲学者マシュー・リップマンによって提唱され、ハワイ大学の Dr. トーマス・ジャクソン（Dr. J）によって 20 年以上実践されてきている「子どものための哲学（Philosophy for Children: p4c）」から学びながら、それを中高一貫校の教員である著者が、学校という場が人間性を破壊する場となりかねない経験に対抗して、人間性を育む経験となるべく実践しつつ、その２年間の道徳と国語の授業実践記録をもとに、反省的に考察したものである。

第１章「はじめに」では、学校教員としてこの論文を書く動機、この論文の構成、授業記録を掲載しつつ考察する際の研究倫理についての配慮を述べている。

第２章「不和と平等」では、著者が p4c を始めた頃のうまく行かなかった経験を、フランスの哲学者ジャック・ランシエールの「不和」に関するテキストから、「無知な教師」が作り出しうる「知性の平等」を考察している。

第３章「困難の解消　ケアへの転向」では、ハワイのワイキキ小学校での Dr. J の p4c の実践を体験し、教室で起きていることを見逃さず聴き逃さないという態度のもとで子どもたちの関心が立ち上がるのをじっと待ち、その興味を探求の方へ導くことを発見したことを述べている。

第４章「P4C の再構築」では、リップマンが始めた P4C（大文字表記）がハワイの Dr. J によっていかにして再構築されてきたかを論じ、p4c ハワイ（小文字表記）が、コミュニティボールやインテレクチュアル・セーフティといった独自のツールを生み出し、アカデミックな哲学（大文字表記）と区別される、テツガク（小文字表記）を大切にしてきた姿勢を紹介している。

第５章「実践としてのセーフティ」では、Dr. J のインタビューと、それを生徒と鑑賞し議論した授業をもとに、「すべての仲間へのリスペクトがある限りで、どんな発言をしても、どんな質問をしてもよい」という表現に象徴されるインテレクチュアル・セーフティが探求を開始するための不可欠な条件であり、それこそが対話や交流を進めることが論じられる。

第６章「教育とは何か」では、そもそも教育とは何かという問いに立ち返り、リップマンが影響を受けた、民

主主義の擁護者、進歩主義教育の提唱者であるジョン・デューイの、「教育を人間の成長と考え、経験の更新こそが我々を進歩させる」という教育観を、著者自身の授業記録と照らしながら考察している。

第７章「連続性と相互作用」では、p4c という学校における実践をいかにして評価するのかとう問いに導かれて、さらにデューイの教育観を『民主主義と教育』のなかに追い、ハワイのカイルア高校で行われている１年間の p4c の振り返りとしてのポスター作成と照らしながら、p4c の経験がもたらす変化と眺望について論じている。

第８章「探求のコミュニティ」では、p4c が目指しているものが、プラグマティズムの始祖であるチャールズ・サンダース・パースの「探求の共同体」という考えにあることを突き止め、そこに、強制や権威とは異なる形で、人の信念や行動を変え、よりよい世界構築に向けて行く可能性を見出している。

第９章「率直に語ること」では、生徒たちが p4c の授業を受けたことで何か変化したことはあるかについて語り合った記録をもとに、フランスの哲学者ミシェル・フーコーが、パレーシア（真理を隠さず、心を開き、率直に他者に自分の心をさらけ出すこと）について論じていたことと照らしながら、インテレクチュアル・セーフティを再考している。

途中に挟まれた二つの間奏「タゴールと鳥」および「強いとか、弱いとか、いうこと」で著者自身の学校での体験のエピソードを折り込みつつ、第 10 章「おわりに」では、著者が本論文で書きたかったこと、表現したかったことを再考し、反省点を踏まえながら、今後の課題を提示している。

全体の分量としては、Ａ４判横書きで 105 ページに、授業研究会で発表した指導案と公開授業対話録、Dr. J のインタビューおよびそれについての生徒たちの対話の資料 40 ページ、参考文献表 10 ページが添付され、本論は、400 字詰め原稿用紙に換算して、約 364 枚に相当する。

【論文審査の結果の要旨】

Philosophy for Children（p4c）といういまだに発展し続けるラディカルな教育の実践について、自身豊かな哲学対話の経験と国内外の実地調査を通して詳しく記述するとともに、自ら教員として学校でこの p4c を実践した記録に基づいて考察しつつ、そうした教育実践の核となるジョン・デューイ思想を再読・再継承し、さらにそれをジャック・ランシエールの政治理論へと接合することを試みるユニークな論考と言える。ハワイでの p4c の実践について詳述と解説を行い、研究者のみならず教育実践者たちがこれからの教育を再考してくための理念と素材をわかりやすく提供している点も評価できる。自ら教員であり、p4c の実践者であるという二重の立場を生かしつつ、個別のコンテクストを尊重し、状況に埋め込まれる対話の身体性、権力性とともに、中等教育現場の諸力のベクトルと問題性を鮮明に浮かび上がらせている。

公開審査会では、自らの授業実践の分析と教育論を結びつけるという点で、やや性急であり、十分な概念的提示に欠ける、という指摘や、道徳教育に哲学対話を導入する動きが目立つ昨今、自らの誠実で良心的な教育・対話実践をさらに推し進めると共に、対話の分析と捉え直し、改善を行って、公教育において対話がもつ可能性と問題性を総体として解明してほしい、という期待の声もあった。しかし、これらの指摘や期待の声は、今後取り組むべき課題を示すものであり、本論文の本質的な価値を損なうものではない。本論文が臨床哲学の社会におけるひとつの実践領野を切り拓く論考として、評価に値するものとして意見は一致した。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。